

愛国心の育成は教育の根本のテーマ

なぜ「愛国心・公共の精神」が問われているのか―教育基本法改正の背景を衝く―

人間の本質を利己的なものとして矮小化する傾向が今日支配的であるが、実は人間は、決してそのようにちっぽけな存在ではない。だれでも、身近に、自分の命以上に大切な人を持っている。妻であれ、夫であれ、わが子であれ、恋人であれ、彼らの生命身体に危難が迫る時、人は迷わず命を賭してその救出に当たる。これが人間の本質である。

人は、己一身の幸せのみを追い求めたのでは、遂に幸せになることができない生き物だと私は思う。絶えず、己を捧げ尽くして悔いることのない何ものかを求め続けるところに、人間の偉大さが存在する。神は人間を、そのようなものとしてお創りになったのではないだろうか。その愛の対象を、家族から友人へ、友人から国家へと拡大していった人間を、われわれは英雄と呼ぶのである。

かつての「国家主義」への過度の反発から、個人は善で国家は悪だとする価値観が定着してしまった。かくして、個人の利益はすべてに優先し、国家、公共のために挺身するのは、何か警戒すべき傾向であるかのような雰囲気根付いてしまったのである。「愛国心は是非か」こんなことが大まじめに議論されるような国家は、古今東西にその例を見ない。なぜ、これほどまでに国家は悪者になってしまったのであろうか。

太平洋戦争における、我が国の予想外の抵抗に驚いたアメリカは、アジア、アフリカ唯一の、この「危険国家」を、軍事的にだけでなく、精神的にも武装解除しようと試みた。極度の言論統制の中で、このための工作は進められたが、その結果、国家、公共の持つ重要性は全面的に否定され、個人が唯一、絶対の価値であるとする「戦後イデオロギー」が形成されるに至ったのである。

だが、個人も人権も、国家をその最終的な拠り所とする。個人が、国家を離れて存在できないものであることを如実に物語っているのは、パレスティナ問題であろう。

様々な事情の末、ユダヤの民は、数千年前に母国を離れねばならなかった。アウシュビッツの悲劇に待つまでもなく、母国を失ったユダヤの民を、どれほどの辛苦が襲ったか、知らぬものはあるまい。「神の正義」を主張して、ユダヤの民はパレスティナにイスラエル国家を建国したが、今度は、そこを追われたパレスティナの民が、難民として苦しみ抜いている。それは、テロの遠因ともなり、世界全体の不安定要因を構成している。祖国を失うとはいかなることか、今日われわれは、それを深く考えてみるべきではないだろうか。

われわれは、齒舞、色丹、国後、択捉の北方領土を、ロシアに不法占領されている。沖縄本島の四倍をはるかに超える面積である。尖閣諸島や南鳥島には、中国が領土的野心を露わにしている。竹島は、紛れもなく日本の領土だが、韓国は、これを不法占領し、官憲を常駐させている。だが、これに対し、国民の間に燃えるような怒りが湧き起こってこない。寸土

を奪われて怒ることを知らぬ民族は、やがて本土をも失う。国家は、国民の燃えるような愛国心なしに、その国境線を維持できなるものではない。

愛国心育成に対するアレルギー的警戒心は、国家だけでなく、公共に仕えようとする精神をも破壊する。今や、国民や国家以上に、己を大切に思う政治家が輩出している。その中には、朝鮮や中国から、何らかの形で「政治資金」を獲得しているのではないと思われるような政治家さえ少なくない。政治家が、外国から買収されるようでは、国の将来が危ぶまれる。

公に、殉ずる精神の崩壊は、今や企業の維持運営すら、困難に陥らせている。総会屋に対し、一億を超える金を渡した大会社の経営者もいた。会社にどれほどの損害がかかろうとも、己一人助かればとの利己心が、この社長の心を支配していたのであろう。己以上の、何ものかのために生きようとする高貴な精神が育っていない世界では、企業ですら、健全に存在し続けることができないのである。

小学校を殺人者が襲ったとき、小学校一年生の担任が、刺殺される教え子を置き去りにし、先に立って逃げたというケースもあった。教師は、教え子の生命身体に危難が迫った場合には、命の危険を顧みてはならぬ職業である。己を持って至高至上の価値とする「ミーイズム」で、その使命を全うすることができるものではない。

家族その他、身近な者への自己犠牲的な愛には、本能的な一面もある。ある意味でそれは、ひとりでに形成される。だが、他人や国家、公共への愛は、放置しておいても育つというものではない。それは、愛国心、公共心を、目的意識的に、継続して育てるのでなければ、決して育たないものなのである。

身近を見回しても、命の危険を恐れず、他人に尽くしている人間は、決して珍しいものではない。逃げ遅れた人を救出するため、消防士は、猛火の中に突っ込んでいく。伝染病が流行し、感染の危険があると知りつつ、医師や看護師は、人命救助のため、命がけの献身を惜しまない。それは、彼らが、その職業の持つ崇高な使命を深く自覚しているからであろう。

他人や国家のために、命を惜しまず挺身してくださる方があるからこそ、われわれの幸せな日々があるのである。そのような献身は、人の心の奥底深くに潜む本能である。だが、その本能を美しく花開かせるための教育は、学校教育の中でほとんど忘れ去られてきた。外国がわが国の領土と侵しても、教師は教え子に、怒りを込めてその事実を弾劾したりはしない。凶悪犯と格闘の末、殉職した警官がいても、その犠牲的精神を賞賛するというようなこともない。そのようなことをすれば、国家主義とか、ファッションなどと言われはせぬかという「戦後イデオロギー」が、教師の心の底流に、根深く存在しているからなのであろう。

だが、敗戦の日より既に六〇年の歳月が流れた。一九四五年に生まれた赤子も、今年で定年を迎える。いつまでもアメリカ占領軍のイデオロギーに支配されている時ではない。個人を価値の根源とする、個人主義の、理念的正しさを把握しつつも、その拠り所である国家や民族の伝統のもつ重さを、次の世代にしっかりと伝えていかなければならない。

それこそは、愛国心の教育にほかならないのである。

(現代教育科学 平成 17 年 3 月号掲載)